

書籍紹介

『日本人の見たオマーンの至宝』

日本オマーンクラブ (Omani Students in Japan) 編著
日本オマーンクラブ、2020年11月、無料

本写真集は、2020年11月発行と記載されているが、実際には本年9月1日に紹介者の手もとに届けられた。できるだけ多くの専門家の下で、研究と広報に役立ててほしい、という趣旨で出版されたものである。もとはといえば、2019年11月に在京オマーン大使館で開催された写真展「日本人の見たオマーンの至宝」と題された写真展を出発点としている。その際、展示された多くの写真の中からフォトコンテストが実施され、その入選作品を写真集の形で出版したものである。したがって、本書に掲載されている写真は、前国王陛下と新国王陛下の2葉の写真以外は、すべて現地を訪問したことのある日本人の作品である。

アラビア半島の東南端に位置するオマーンは、古い歴史のロマンと美しい自然の光景に包まれた国であると同時に、中東イスラーム世界の複雑な政治的経済的な渦に巻き込まれることなく、静かに平穏な社会を維持している稀有な国でもある。イスラームのイバード派が主流派であるが、他の宗派やキリスト教徒やヒンドゥー教徒とも共存している。

インド洋を介してインドなどのアジア圏との交流の歴史も長く、今日でもインドからの産物が多く用いられている。また紀元前から香料や生薬の原料となる乳香の産地でもあり、乳香を原料としたアムアージュという高価な香水も有名である。本書は書店などで販売していないので、簡単に手に入らないが、機会を得て、ぜひ一度手に取って鑑賞していただきたい。

『アフガニスタンを知るための70章』

前田耕作・山内和也編著、明石書店、
2021年9月30日、2000円+税、
ISBN978-4-7503-5243-5

アフガニスタンにおけるアメリカを中心とする外国勢力の支配が突然、収束を迎えた時期に、偶然にも出版された書籍である。アフガニスタン人の学生組織から発生した武力組織ターリバーンがアフガニスタンのほぼ全土を支配して、

首都のカーブルを占領した8月15日には、このような事態を想定することもないままに本書は出版される予定であった。しかし、この変化は辛くも最後の3ページに「補論 アフガニスタン情勢の変化」として追加された。緊急の手当てに過ぎなかつたが、書き込めてよかつたと紹介者も思う。

本書は、アフガニスタンの自然、歴史、社会と暮らし、経済事情、伝統文化、文明の十字路、日本との深い関係、アフガン空爆からの復興など、丁寧に解説されているが、本書全体にあふれているのは、それぞれの著者のアフガニスタンに対する深い愛情と悲嘆である。ターリバーンもアル・カイダもいなかつた日々、21世紀が失ってしまった日々を懐かしむ思いが伝わってくる。明石書店のエリア・スタディーズのシリーズの中で、おそらくこれほど愛と悲しみに満ちたシリーズはなかつたのではないかと思わせる。ターリバーン支配下のアフガニスタンが以前のような穏やかな美しい国に戻るには、どれくらいの日々が必要なのか、早急な復興を願わずにはいられない。

(紹介者、塩尻和子)

